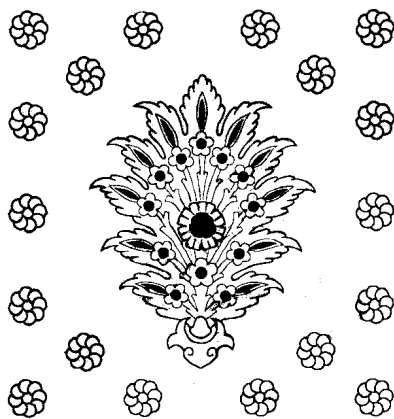






上林 曉
木山 捷平



集英社

日本文学全集

全88巻



52

上林 曉
木山 捷平 集

昭和五十年二月八日 初版
昭和五十七年十月二十五日 四版

著者

上林 曉
木山 捷平

発行者

堀内 末男

発行所 株式会社 集英社

一〇三 東京都千代田区一ツ橋三ノ五ノ二〇

電話 出版部 東京(三三)六四三
販売部 東京(三三)三七八

印刷 大日本印刷株式会社

著者との了解により検印願止いたします。
落丁本、乱丁本はお取りかえいたします。

編集委員

伊藤 整
井上 靖
中野 好夫
丹羽 文雄
平野 謙

挿 装

絵 幀

大 後

村 藤

連 市

三

目次

上林 曉集

薔薇盗人

ちちははの記

野

不思議の国

明月記

風船競走

小便小僧

現世図絵

聖ヨハネ病院にて

九

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

死者の声

一七

青春自画像

一七

姫鏡台

一八

春の坂

二〇

白い屋形船

二二

木山捷平集

うけとり

二三

耳学問

二五

大陸の細道

二七

軽石

二八

注解

四〇二

作家と作品

渡川 曉

四一四

年譜

四四八

上林
曉集

人生には直路

ばかりはない

迂路もある

歩かねばならぬ

上林堯

薔薇盗人

校門ぎわのたった一株の瘦せた薔薇——しかもたった一輪咲いた紅い薔薇の花が、一夜のうちに盗まれてしまった。鋭利な刃物で剪ったのではなく、延びた爪で摘みきってあった。朝になってみると、柔い切り口はもう黒く萎びていた。花のなくなった枝や葉のうえを、蟻だけが所在なさそうに、でも忙しそうに這い廻っていた。

朝っぱらから学校じゅうがおおげさな騒ぎになった。朝礼の時、全校の生徒を集めて、校長が亢奮した口調で厳格な訓辞を与えた。たとえ一茎の薔薇の花であつても、せっかく可愛らしく咲き開いた花には、朝夕水をかけてやるだけの奥床しい心掛けがなくてはいけない。それをまた盗み取るなんてことは、動物や植物を愛護しないばかりではなく、愛校心にもとるものであると極めつけた。しかしいったん過ちを犯した人は今さらしかたがないから、もし万一皆さんのうちに、あの薔薇の花を折

り取った人があるなら、正直に、包み隠さず、あとで受持先生のところまで申しでてくださいと結んで、二十分に近い訓示を終った。

もともと桜の木が自慢の野なかの小学校である。桜の木ばかり五十本ほどが、学校のぐるりを取り巻いている。毎年三月の卒業式には、来賓という来賓が、かならず窓の外を飛び散る桜吹雪を指さして、生徒たちの前途を祝福するのである。それが、今日このごろは若木も古木もみごとな葉桜になって、紅黒く熟れた桜ん坊が地一面に落ち散り、生徒たちの足の下に踏んづけられている。それらの桜の木を除いては、木らしい木は一本もない。しいて何かの木を求めるならば、——それが校門脇の瘦せた薔薇の一株なのだ。だからこそ、その薔薇の株に花が一つ咲いたとなれば学校じゅうから珍花のように愛顧せられるし、折り取られたとなると、かけがえのない貴重なものが喪われたように学校全体の騒ぎとなるのである。

終日教員室の話題にもなったし、生徒たちの間でもいろいろ取沙汰されたけれども、「先生、私が折りました」と申しでるものはいかに現われなかった。

仰け反って大人を見上げる子供のように、仰け反って咲いていた花がなくなったので、油虫さえもう薔薇の茎

を見捨てた。そのずんばろ坊主の薔薇の株を見てかえりながら、先生も生徒も、あの紅い花はどこへ捨てられたんだろうと、心の隅で考えた。明日の朝、朝日が照つても、露に濡れた花はもう輝かない。……

学校の庭に咲いていた真紅の薔薇の花は、昨夜から仙一の家の座敷で萎びつつあった。もっと正確に言えば、仙一の妹の由美江の胸の上で萎びていた。

由美江は五つになる女の子である。由美江はお父さんの綿の袷を着て、じくじくに破れた古畳の上に寝ころんでいる。お父さんの着物は、由美江の手も足もすっぽりくるんでしまつて、余つた袖口は垂れ下り、裾は畳に引き摺っていた。そのうえ垢でじつとり重たく、綿目もわからぬ。その垢じんだ着物の胸に、まっ紅な薔薇の花を徽章のようにくつつけて、仰向けに寝転がっているのである。夜になつても電気灯はもちろん、洋灯も蠟燭もつけず真つ暗なまま、昼でも薄暗いこのあばら家のなかで、薔薇の花だけが、派手な、それだけ不気味な強い色彩で輝いている。だが花が萎びるにつれ、その輝きもだんだん衰えて行くのであった。

五年生の仙一は皆からはぐれ、急いでかえつてきた。先生や生徒たちの顔がみんな恐ろしく、それに追っかけ

られるような気がして、われ知らず走つていた。家のなかへはいつてくると、由美江の胸につけた薔薇の花が、一時にくわつと躍きくるめいたような気がした。頭が痛んだ。彼は自分が盗んだ薔薇の花を恨んだ。

由美江のそばへ寄つて行くと、由美江はぱっちり眼を開いた。薩摩芋のようにいびつに赤肥りした大きな顔の端つこのほうに、飯粒のように白くくつついた小さな眼である。いま隣村の芝居小屋に掛つている芝居で子役が欲しくなり、座長と差配とが由美江を買いに来たのであつたが、どんなに顔をつくつてみたところで舞台には立てないというので相談がなりたえなかつた。子役にも買われぬ顔！ 眠っているとばかり思つていたのに眼をあけたのは、眼をあけてるのが大儀だから、ただぼんやり閉じていたのであろう。

「いや、いや」と由美江はだぶだぶの着物のなかで身をもがいた。だが仙一は、縫目に挿しこんだ花を素早く抜き取ると、一ひら一ひら丹念に花びらを掻き取り、最後に蕊も花びらもいっしょくたに手のなかで揉み円るめて、暗い土間を目掛けて投げ捨てた。

由美江は悲しげな表情をして兄のことを眺めていたが、詮めたのか泣きもせず、そのまままた静かに眼を閉じた。ゆうべ、薔薇の花を胸に挿してやつた時には、

弱々しいけれども抑えることのできない喜びを、その疲れた臉に浮べたのであったが、今はもうその影は跡型もなく、臉はもとのままに疲れていた。

奥の方の壁ぎわで、襦袢蒲団のなかでからだをくねらせながら、父親の喜八が咳をした。咽喉につまった痰を吐きだす咳であった。喜八は仙一の方をちらと見たけれども、何も言わなかった。

仙一は学校の荷物を抛りだすと、由美江と利江の間へごろっと身を投げた。利江は七つになる女の子である。

由美江も利江もろくろく飯が食えないのに、由美江は辛のように肥り、利江は骨と皮に瘦せ細っている。利江の瘦せ細ったのは飯を食わないせいもあるが、犬に対する恐怖病にもよるのである。利江は外を歩いていても犬ばかり警戒している。夜なかに突然泣き喚くことがある。

「犬が来た、犬が来た」と言つて胴際泣き喚くのである。利江は仙一が鰯釣りに行くときの腰巾着である。仙一が釣竿と蚯蚓箱を提げ、利江が魚籠を持って川へ行く。仙一が自分の背丈よりも長い鍬の柄を持って野原で蚯蚓を掘っているときには、かならず、利江が蚯蚓箱を持ってそのそばに蹲んでいるのであった。

利江も襦袢にくるまって寝ていた。利江と由美江の間へ身を投げた仙一も襦袢をひつ被つて、日はまだ高いの

に眠る準備を整えた。からだがひどくだるい。今日も昼飯は食わなかった。夕飯も食べられそうにはない。

夕方が来て、三人の子供たちが眠りに陥っている時、喜八はやっと床から這いだし、晩飯代りに芋をふかした。米は一粒もない。

——喜八がなまけ者の極道者であるという世間の非難はいちおう当っている。ことに去年の夏、働き者の女房お由布が死んでからは、嫌でも応でも二人前の仕事をせねばならないはずなのに、なんにもせずにごろごろしているところからみれば、あながち世間の非難を斥けることはできない。

だが、世間の非難も少しは酷なようだ。現に喜八は左手の指が生れつき四本しかないのだ。中指が一本足りない。なるほど見かけはがっしりした大きな骨つ節だ。けれども、欠陥をもった彼の病質な体軀のなかには、おそらく濁った血が流れ、頭はいつても重く、からだの芯はいつも病んでいるにちがいない。そのために彼は働くことが嫌なのだ。その上彼が三十代までは、親爺といっしょに自作していた同じ田地を、四十代の今は小作をしているのだ。張り合ひがないたらありゃしない。彼はふて寝をはじめた。と同時に、いよいよ親子四人が飢餓に曝されることになった。芋ばかり食った。時々親類の者

が米を持ってきてくれることはあつた。近所から繭の蛹を貰つてきて、醬油で煮めて食つたこともあつた。鶏は卵を産んだ。すると仙一が、生みたての卵を提げて菓子屋へ走って行き、瓦煎餅や巻煎餅に替へてきた。それをみんなが分けて食つた。(菓子屋では卵をまた菓子に使つた)だが、毎月五円だけはきまつた取入が彼にもあつた。十五になる娘の富江が伊勢の紡績から送つて寄越すのだ。富江は死んだお由布の連れ子で、喜八の家へ母親といっしょに來た時はまだ赤ん坊だつた。その富江の仕送りが今は家内じゅうのただ一つの頼みの綱なのだ。

喜八は寝ころびながら、それでもときどき「青年」のころを思いだすことがあつた。彼も若い時はなかなかの洒落者であつた。赤い絹糸を桃色珊瑚の緒で締め、桐の胴乱を腰に下げていた。雨の夜は、蛇の目の傘をさし、蕙の葉の模様などを描いた女用の先革をつけた足駄を穿いて、娘のうちへ遊びに行った。ふところには、「孝子五郎正宗」という講談本などを入れていた。そんなにして洒落れのめしてはいるが、どこかしら間の抜けたところのある洒落者であつた。むごたらしく言え、指の一本足りない肉体的欠陥を、あらゆる扮装で補おうとする悲しいお洒落だとも思われた。そして彼のお洒落がどんなに間が抜けていたかは、四本のうちの裏指

にあたる肉太の指に、金鍍金の指輪を誇らしげにきらめかせていたではないか！

喜八はやがて湯気の立つ芋を小箆に移し、それから三人の子供たちを揺すぶり起した。子供たちは箆を目がけて這い寄つた。喜八はまた床の中へもぐりこんだ。

そのあくる日の放課後、仙一は教員室に残されて、受持の松原先生と向ひ合つて立つていた。仙一の薔薇盗人が暴露したのだ。

松原先生は耳から膿が出るので綿を詰めこんで、袴をはいていた。仙一は先生の顔を見たり、先生の背後の壁に凭せかけた日露戦争分捕品の錆び鉄砲を見たりしていた。

仙一が教員室に留め置かれるのは、これで何度目かであつた。そのうちでもめばしいのは、卵買いの助さんの荷籠を揺さぶつて、卵を三十ばかり潰した時。助さんはうすのろで、子供たちからばかにされていたが、その時ばかりは学校へ扭じこんできたのだつた。その次ぎは、路傍の干大根へ「男、女、男、女」と落書した時。洗いたての白い干大根がずらりと懸け並べであつたのが、書き方の時間を終えてかえってくる仙一たちに落書の魅力をもそつたのだつた。



RÉN

さて、松原先生は額に筋を立てて向い合っていたが、いきなり鞭で、仙一の頭をびしやりと打った。仙一はよろめいた。固形物のような涙が一つ、ころりと落ちた。

「寺田、君は薔薇の花を盗んだな」

「はい」先生の糊幕があまり高圧的だったので、仙一は思わず簡単に白状してしまった。

あの日の夕方、仙一は鎌を持って、釣竿にする竹を切りに山へ行ったのだ。かえりに学校のそばを通ると、きゆうに薔薇の花が欲しくなった。自分が欲しくなったというよりも、うちで寝ころんでいる由美江の胸に押してやりたいと思ったのだ。それは、あのあばら屋のなかで華やかな色彩に飢渴していたところから来た欲望であった。そこでふらふらと摘んでしまった。——夕方学校のそばをうろうろしていた仙一の姿を見かけたというものが出てきて、仙一に疑いがかけられ、それが適中したのであった。

「盗んだ薔薇はどうしたかね」先生の声は少し和らいでいた。

「由美江にやりまひた」

「由美江というのは誰かね」

「妹です」

「妹はよろこんだか」

「よろこんだかアよろこびまひたが……」

「それがどうした」

「握飯や焼飯貰うてきた時にや、かなわんと思いまひた」

その時松原先生の頭には、薔薇盗人としての仙一よりも、欠食児童としての仙一の姿が、強く頭に浮んできた。

「君は屋飯食べたか」

「食べません」

「朝飯食べたか」

「隣のおばさんに焼飯貰いまひた」

「腹は減らんか」

「減りまひた」

額がおでこで、一種岩石のように頑固そうな顔つきをした仙一ではあるが、今そこに立っている仙一には、どこかしら打ち萎れたところがある。試みに彼の着物を剥ぎ取ってしまえば、腹が病的に膨れ、胸が落ち窪んでいるにちがいない。彼は朝礼の時でもぶつ仆れたことがたびたびである。食べものらしい食べものによって、彼からだが保たれていないせいだ。

「仙一、飯食うたか」朝萎れきって学校へ出かけて行く仙一を、隣のおばさんたちが呼び止める。

「食わん」仙一はかすれた、憐れっぱい声で答える。そ